設楽発掘通信

No.64
令和３年
９月号

下延坂遺跡の地元説明会を開催します

日頃より愛知県埋蔵文化財センターの発掘調査にご理解とご協力を賜り、まことにありがとうございます。

当センターでは今年度の五月より、川向地区の下延坂遺跡で発掘調査を行なってまいりました。今年度の調査面積は６８００㎡で、A～C区の三調査区に分けて調査を実施しております。

A区では縄文時代晩期後半の竪穴建物跡１棟と土器埋設遺構２基を確認し、八月末に調査を終了しました。

B区では、縄文時代中期後半の竪穴建物２棟以上と土器埋設遺構（埋甕）１基を確認し、現在はC区の調査を継続しています。

このB区の竪穴建物とC区の調査成果を皆様にご覧いただくために、九月二六日（日）の午前十一時より、現地にて地元説明会を開催いたします。ぜひご来場くださいますよう、お願い申し上げます。

（樋上　昇）

図１　竪穴建物跡検出状況

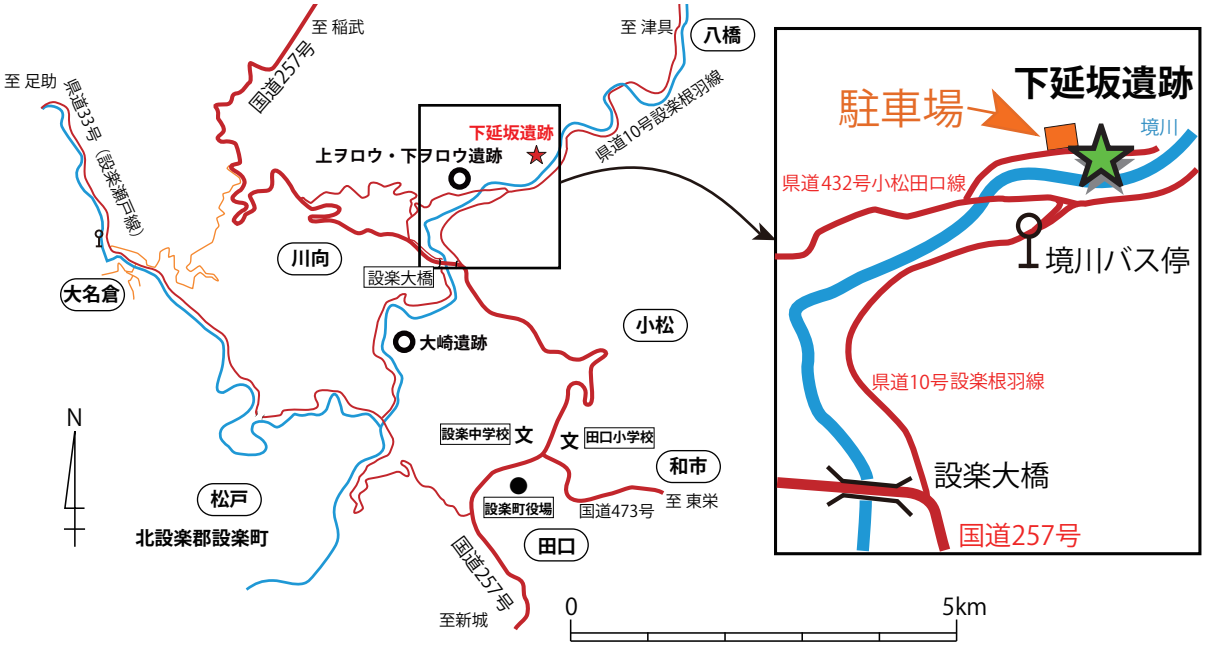
図２　土器埋設状況

下延坂遺跡 地元説明会 会場のご案内

９月２６日（日）午前 11 時～12時、遺跡現地で遺跡の説明と遺物の展示を行います。

ご参加の方々には、ご名前と連絡先のご記入をお願いします（感染予防対策以外には使用しません）。

＊開催の詳細・お問い合わせは、愛知県埋蔵文化財センター調査課（電話 0567-67-4163 ）、樋上携帯（080-1571-4983）まで。



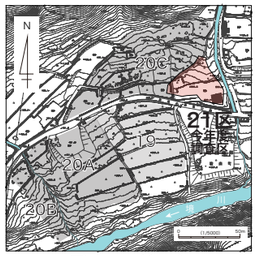
上ヲロウ・下ヲロウ遺跡発掘調査

六月から実施していました上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査は、七月三十日をもって終了致しました。皆様には平素から調査にご理解頂き、お礼申し上げます。本誌では、今年度の成果について、まとめてお知らせ致します。

縄文時代　北側の緩斜面で縄文時代の遺物包含層が確認され、竪穴建物跡ではないかと思われる遺構も見つかっています。中央には石囲炉跡がありました。遺構内からは土器片や石器が出土しています。昨年度20C区で見つかった竪穴建物跡同様、縄文時代後期初頭～中葉（約4400～3800年前）のものと考えられます。

古代～中世　調査区の西端で、斜面上方から流れる沢の跡が見つかりました。堆積した土の中からは、灰釉陶器（椀や壺）や山茶碗が出土しています。

戦国期から近世　調査区の南半で、柱穴や土坑など、近世ヲロウ集落の生活の様子がうかがえられる遺構が見つかりました。柱穴は縄文時代の遺構・包含層が残る段差下の壁際に並行して見つかっており、列をなしていることから柵列の跡であったと考えられます。柵列は3列以上確認されています。また、南東側に向かって低くなる地形を埋めて（整地層）、広い平坦面を作り出していたことも分かりました。整地層は厚さ最大50cmほどで、巨礫や炭化物が多量に含まれていました。近世の遺構や整地層からは、天目茶碗・擂鉢・鉄釉甕・内耳鍋・砥石などの遺物が出土しました。



前回号でお知らせしましたように、今回の調査の説明会は、オンラインの動画によって実施しており、期日は九月十日までとなっています。動画終了後も印刷資料に関しては、引き続きダウンロード可能となっています。よろしければ、ご利用下さい。

（川添和暁）

図５　戦国時代～江戸時代整地層（東より）および出土遺物【天目茶碗】

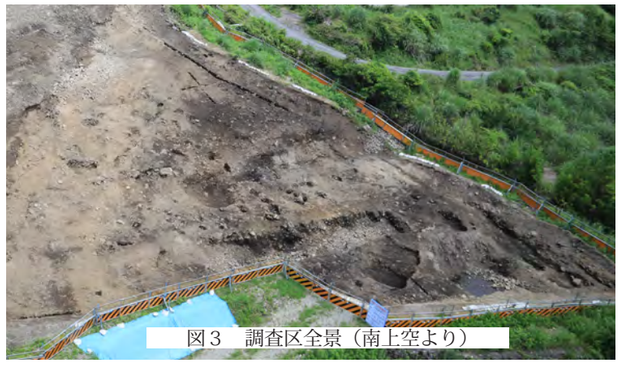


図３　調査区全景（南上空より）

図６　縄文時代竪穴建物跡？（北より）

図４　江戸時代 柵列跡（東より）

下延坂遺跡発掘調査

下延坂遺跡の21A区は、全体の大まかな調査を終え、空中写真撮影を8月4日に行い、現在補足調査を行なっております。

今年度の調査の成果として、21A区の北側（図7赤枠）では近世の陶器片と柱穴列と思われる複数の土坑が、21A区の中央（図7青枠）では骨片を伴う近世の墓跡と思われる土坑が2基、片方は江戸時代の寛永通宝の銅銭と共に見つかりました。21A区の中央では、墓跡のさらに下層で縄文時代晩期の土器片や石器を多数伴う黒色土の層が見つかりました。さらにその土層内で新たに竪穴建物跡と思われる遺構が1基と、地面に穴を掘ったのち、土器を意図的に立てて埋めた土器埋設遺構が2基見つかっています（図8）。また21A区の南側では過去の土石流や旧河川によると思われる痕跡が見つかっており、過去の下延坂遺跡周辺の環境を考察する上で良い資料と言えます。

21A区の調査もあとわずかとなりました。最後まで慎重に、事故のないように気を付けて行なっていき、次回最終的な報告を行いたいと思います。

（渡邉　峻）

図７　下延坂遺跡21A区　空撮写真

図８　A区土器埋設遺構

図９　B区縄文時代埋甕

21B区では調査が進み、大部分の様相が判明しました。全面に遺構が展開するわけではありませんが、一部では注目すべき成果が挙がっています。

まず、21B区の西側では、縄文時代の埋甕が検出されました（写真9）。これは、一般的に竪穴建物内に穴を掘って土器を据えるもので、今回見つかったものは底部～胴体下部までしか残っていませんが、真っ直ぐ立った状態であり、当時設置された状態を保っているものと思われます。

一方、21B区の東側では、縄文時代の竪穴建物跡が2箇所で見つかりました（写真10）。それぞれ、最低1回の建て替えが行われており、本格的に掘り下げる前から、土器や石器が次々出土しています。その中でも、今回掲載したものは残りのいいもので、縄文時代中期後半の特徴を示しています（写真11）。

また、21C区でも表土の除去が始まり、石器類が出土しています。今後の調査ではさらなる遺構・遺物が見つかる可能性があります。

（河嶋優輝）

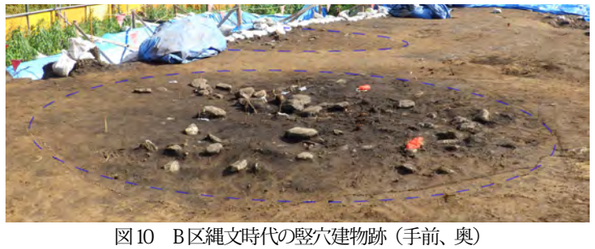


図10　B区縄文時代の竪穴建物跡（手前、奥）

図11　B区竪穴建物跡出土土器

川向東貝津遺跡の旧石器時代

川向東貝津遺跡は設楽町の川向に所在する遺跡です。発掘調査は平成22年、27年、28年の計3回行われました。旧石器時代の遺物としては、尖頭器文化期と細石器文化期の2時期が報告されています。ここでは特に尖頭器文化期に属する石器群についてお話したいと思います。

尖頭器文化期（約二万二千年前）として報告されている剥片に注目すると、出土した剥片のうち多くが縦長剥片（打点から縦に長い剥片）であり（図12）、石核に注目すると剥離の状況から一方向ないし2方向から縦長剥片を連続して剥離していたと考えられます（図13）。これに対して、尖頭器は横長剥片（打点から横に長い剥片）を縦方向にして加工を施したと思われ（図14）、また横長剥片や横長剥片を剥離したと思われる石核も見つかっています（図15）。

これらのことから考えられることは、石器によって素材の使い分けがあったということです。例えば、尖頭器には横長剥片、他の石器には縦長剥片というような形です。素材剥片の使い分けについては諸説あり、素材剥片の形や厚さ、石材などがその基準とされています。

以上、川向東貝津遺跡の尖頭器石器群について触れてみました。設楽町周辺に広がる旧石器時代についてはまだまだ未解明、今後の資料の増加が待たれます。

（社本有弥）

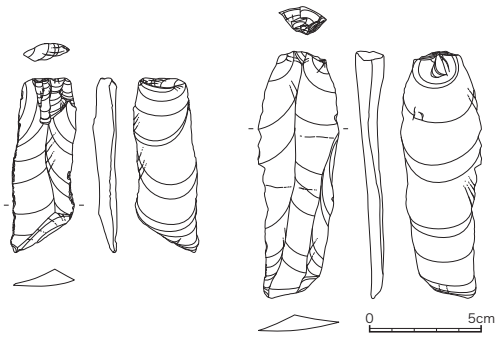


図 12　川向東貝津遺跡出土の縦長剥片・石刃

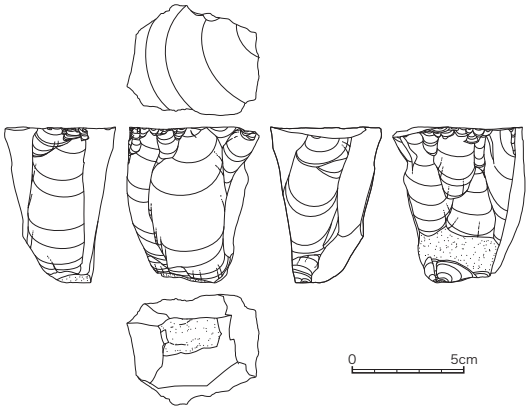


図 13　川向東貝津遺跡出土の石核

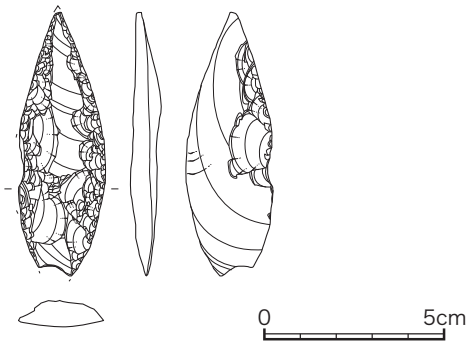


図 14　川向東貝津遺跡出土の尖頭器

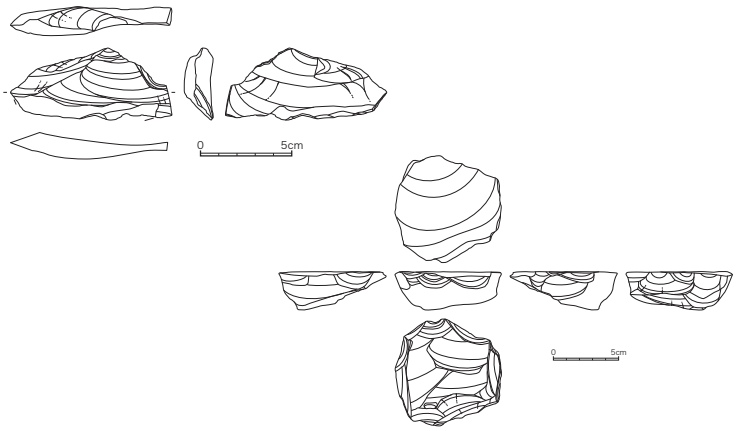


図 15　川向東貝津遺跡出土の横長剥片と石核

設楽発掘通信
No.64
令和3年9月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話 （0567）67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ http://www.maibun.com
Facebook https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　株式会社イビソク